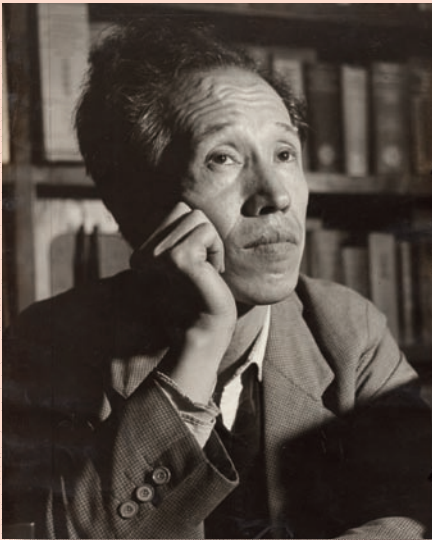


短歌

ともひろやすいち
友廣保一

山口市
(1904～1993)



【著作】

歌集『流るる音』（昭63・石川書房）
歌集『へ続へ流るる音』（平2・石川書房）

【閲覧情報】

中原中也記念館

父友廣保一は寡黙な人であった。心の裏を短歌に注ぎ込んだ一生であったと思う。三十一文字に魅せられたのは、小学校の先生の影響らしい。

若い頃のことはあまりはっきりとはしないが、十代の時期朝鮮に渡り、生活を通して労働の厳しさ、人種偏見の現実を身をもって味わった。

その後、京都の一灯園に入り奉仕活動に専念する。父の生涯を貫いている考え方、欲を持たず足るを知る、又人のために尽くす無償の精神は、この時培われたのではないかと思う。

西田天香を慕ひて家出せし少年の

わが心今も残るかと思ふ

四国松山に居る頃、中村憲吉の友人で松山高商の先生の勧めもあり、布野を訪ねる。念願がかなって直弟子にしていた。父の中村先生への思慕と畏敬の念は並外れたものがあった。しつかりと目をかけて導いていただいたと父から聞いている。中村先生が亡くなられた時の一連の歌は、こみ上げてくる哀しみ嘆き、父の心情が切々と伝わり胸にせまりくるものがある。

その後は斎藤茂吉、そして土屋文明に師事する。生涯、土屋先生は神様のような存在であった。

昭和五年（一九三〇）古書店「第三書房」を起こす。店には帰郷した中原中也が来店した。種田山頭火も立ち寄った。昭和八、九年頃の話である。

われは無口中也さん又無口にて

第三書房に向ひ座りき

托鉢のさびしき姿かの場所に

昨日のごとくわれは思ふも

商売は母に託して短歌活動に勢力を注ぎ込んだ日日。家族の協力がなくてはなし得なかった父の活動である。それゆえ家族のことは眼中にないのではと思っていたが『アララギ』を紐解いて父の歌をまとめた折、妻子のことがさりげなく詠まれているのを知った。父の家族への思いを改めて感じたのである。生涯ふる里に根を下ろし短歌一筋。紅葉した一本の老樹は、色どられた一葉一葉の歌を最後まで散らした、満足できる人生であったと信じるのである。

生きてゆく過程は風の吹きさぐる

一瞬にして人はさびしき

若き日、着流しの浴衣に下駄ばきで、暮れた大山に登ったという、語りつがれている父の武勇伝を思い出している。

（文・富田瑛子）

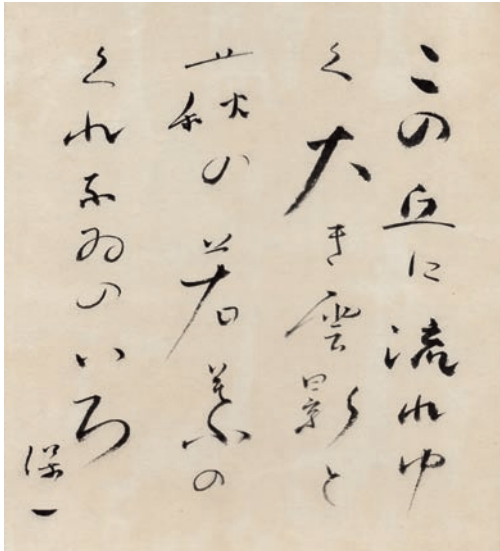


瑠璃光寺五重塔前（山口市）

在り慣れて散歩のところが池のへの

五重塔に心はよりて

保一

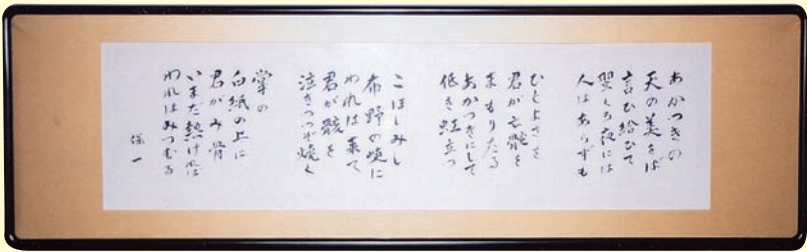


自筆色紙

悼中村憲吉先生

あかつきの天の美をば言ひ給ひて
翌くる夜には人はあらずも
ひとよさを君が亡骸をまもりたる
あかつきにして低き虹立つ
こほしみし布野の峽にわれは来て
君が骸を泣きつつぞ焼く
掌の白紙の上に君がみ骨
いまだ熱ければわれはみつむる

（歌集『流るる音』 石川書房より）



友廣保一 年譜

（提供・富田瑛子）

明治37（一九〇四）年

一三歳

大正6（一九一七）年

一五歳

大正8（一九一九）年

一八歳

大正11（一九二二）年

二〇歳

大正13（一九二四）年

二二歳

大正15（一九二六）年

二二歳

昭和2（一九二七）年

二四歳

昭和3（一九二八）年

二六歳

昭和5（一九三〇）年

二九歳

昭和8（一九三三）年

三二歳

昭和10（一九三三）年

三五歳

昭和12（一九三三）年

四〇歳

昭和14（一九三九）年

四七歳

昭和16（一九四一）年

五二歳

昭和18（一九四三）年

五六歳

昭和19（一九四四）年

六〇歳

昭和20（一九四五）年

七〇歳

昭和21（一九四六）年

七四歳

昭和22（一九四七）年

七八歳

昭和23（一九四八）年

八〇歳

昭和24（一九四九）年

八四歳

10月28日、山口県熊毛郡室積村（現・光市室積）に友廣家四男として生まれる。
室積附属小学校6年生時の先生に影響を受け、歌を始める。
山口県立室積師範学校附属小学校高等科2年卒業。
広島市の書店「広文館」で働く（大正12年）。この頃から『白梅』に短歌を投稿し始める。
広文館の支店「隆盛堂」（松山市）で支店長として働く傍ら（昭和2年12月）、『山脈』・『黒潮』の編集に関わる。「短歌雑誌」に短歌を投稿する。
『あけぼの』に短歌を投稿し始める。
1月、『アララギ』に入会。中村憲吉・斎藤茂吉・土屋文明に師事する。
1月、再び広文館で働く（昭和4年12月）。
1月、京都の平安書店で働く（同年5月頃）。10月、山口に帰郷し山口市札ノ辻に古書店「第三書房」を開業する。
2月、『水可美』創刊。編集同人は友廣の他に小川五郎、山根芳一、宇佐川正明らがいた。発行は第三書房。3月、結婚。
5月19日、広島で中村憲吉一周忌追悼歌会に出席。翌日、広島県布野村にある憲吉の墓に参る。
『水可美』同人であった津崎皓の歌集『秋沙』の編集をする。12月、山口市米屋町に第三書房を移転。
6月、「防長文学運動回顧座談会」に出席。
『詩園』『防長文学』に短歌や批評文を寄せる。
6月、山口県文学報国会の結成式に出席。報国会は郷土古典文学・和歌・現代詩・俳句・小説戯曲・小国民文学・漢詩の7部会に分かれており、友廣は和歌の部で参加する。
山口刑務所受刑者短歌会の指導を始める。篤志面接委員。
刑務所収容者歌集『姫山』を編集する（昭和36年）。
1月、『なぎ』創刊から編集兼発行者となる（昭和40年12月）。
5月、『国繁英男歌集』をまとめる。国繁英男は友廣と同じくアララギの同人。
文化協会の創立。短歌部門会長となる。
小川五郎・博子『春蘭』の編集に携わる。
文化庁表彰受章。
勲五等瑞宝章受章。
7月3日、第三書房を閉店。
瑠璃光寺五重塔前に歌碑建立。10月、石川書房より第一歌集『流るる音』を刊行。
12月、石川書房より『へ続へ流るる音』を刊行。
9月7日、肺炎のため、死去。